

八木健に学ぶ滑稽俳句 16

高橋 素子

昼からはちと影もあり雲の峰

小林一茶

雲の峰芯のあたりは固からむ

八木健

昨年、啓蟄に因んで「天声人語」に掲載された一茶の言葉遊びの一句である。一見、夏の空の情景を写生した様にみえるこの句には、蛭・蚊・蜂・蜥蜴・蟻・蜘蛛・蚤と七種の小さな生き物が隠されているという。流石、一茶の名人芸とも言える言語遊戯の名句である。

「雲の峰」は、積乱雲、通称入道雲・雷雲と呼ばれる夏の雲であるが、陶淵明の「夏雲奇峰多し」の詩語からこの名が起こったと、言われている。

師・八木健は、むくむく太り大入道が襲いかかってくるようにも見える雲の峰を眺め、頭の中に浮かんだ思いを写生。「あの綿菓子のような積雲に比べて、この雲の峰の芯のあたりには、ドライアイスのような固まりがあって、それが気化して雲になっているようだ」と想像を詠んで、滑稽句の佳句となった。「対象を凝視して何かを発見し、感じたままを写生すると、可笑しい一句が生まれて来ます」と、師匠の言葉が聞こえて来るようだ。

今回も古今の名句と師の句より、学習を深めて行きたい。

鰯雲人に告ぐべきことならず

加藤楸邨

一匹の離脱もなくて鰯雲

八木健

イナバウアー状態鰯雲見上げ

八木健

鰯雲は秋の季語である。掲出の楸邨の句では、「胸中にある思いは決して他人に告げることではなく、告げてはならない」と強い意志で詠んでいる。しかし、そう思えば思う程、その思いは作者の胸中に、まるで鰯雲の如くさざ波だって広がって来るに違いない。この心の葛藤と秋の季語「鰯雲」とがひびき合って、名句となった。

師・八木健の一句目は、鰯雲、通称鯖雲・鱗雲・羊雲とも呼ばれる巻積雲を擬人化。秋空一面に斑点状または列状に広がるこの雲をその名の通り、鰯の群れと見立てて擬人化、一匹の鰯の離脱もないと詠んで滑稽句の佳句となっている。

「イナバウアー」は本来、1950年代に活躍した旧西ドイツの選手、イナバウアーが開発した足を前後に開き、つま先を180度開いて真横に滑る、フィギュアスケートの技である。2006年のトリノオリンピックでは、金メダリストの荒川静香さんの大きく反り返った姿態の美しいこの演技に、国中が沸き「流行語大賞」にも選ばれた。この流行語をすぐに取り入れて、師匠は滑稽句を詠んでいる。

逃水を追ふ逃水となりしかな

平井照敏

逃水は神のお洩らしかも知れぬ

八木健

道路や草原の前方に水溜りがあるように見えるが、近づくとまた遠ざかって見える現象を「逃水」という。春、強い日差しの下、車で走っていると、砂漠でオアシスを見つけたようで、どんどん逃水を追っている気持ちになるが、見方を変えて見ると、確かに、掲出の平井照敏の句のように、逃水自体がその先の逃水を追っているようにも思えて来る。実体のない逃水も、見方ひとつで面白い句になる事を教えてくれる名句である。

掲出の師・八木健の句は、童心に戻って心を空っぽにしてみると、「神のお洩らし」かも知れないと感じて、そのままを非科学的に句に詠んでいる。「反復すれば、滑稽句は見たままでなく、頭の中に浮かんだものも写生します」と、師匠は笑った。

春の水とは濡れているみずのこと 長谷川権

春の水押すな押すなと流れゆく 八木健

掲出の長谷川権の句には、一読してはっとさせられる。「濡れている水」とは、あたり前の様で、誰も思い付かなかった面白い言い表し方である。冬枯れから一変して、豊かになった春の水の質感を、見事に表現した名句と言わざる得ない。

師・八木健の句は、春になって雪解けの水や雨水が流れ込んで水かさを増し、川幅いっぱいに流れてゆく水を「押すな」という一言で擬人化、見事な滑稽句の佳句となっている。

しなのちやそばの白さもぞつとする 小林一茶

そばかすの女立つ蕎麦の花のそば 八木健

夏の終り、蕎麦畑の白い花がいちめんに咲けば、蕎麦しかとれない寒村に、たちまちに絶望の冬が来る。信濃路自慢の蕎麦に「ぞっとする」などと、吐き捨てるように言ってみせるのは、一茶独特の手であるとしても、十五歳で村を出た時と何ら変わらぬ信濃路の風景を見ると、継母とのいさかい、貧しさ、旅の疲れ・・・等、一瞬苦い哀愁を伴って心をよぎるものがあつたに違いない。対象が清楚な白い蕎麦の花であるが故に、なお一層ぞっとするような怖さを持って、読み手に迫って来る名句である。

師・八木健にも、言葉遊戯の句はいろいろあるが、掲出の句は、そばかす・蕎麦の花・傍等、「そば」の同音意義語を駆使して写生、上手い滑稽句を形作っている。